

# 生駒市農業ビジョン推進懇話会 第12回会議録 (要点筆記)

1. 開催日時 平成30年11月14日(水) 午前10時00分～正午
2. 開催場所 生駒市役所 4階 403・404会議室
3. 参加者 池上氏(座長) 井上氏(副座長) 浅井氏 上武氏  
田中氏 樽井氏 中田氏 中村氏 (五十音順)  
(事務局) 石畑地域活力創生部長 川島地域活力創生部次長 林農林課長  
巽農林課課長補佐 桑田農林係員
4. 会議の公開・非公開 公開 傍聴人数 なし
5. 議題 (1)前農業ビジョンを踏まえた新たな農業ビジョン策定の背景  
(2)生駒市の農業の現状について  
(3)消費者ワークショップについて  
(4)飲食店・学校給食センター聞き取りについて  
(5)農家アンケート結果で分かったこと  
(6)これからの生駒市の農業の方向性について  
(7)その他

## 6. 審議内容

### (1) 前農業ビジョンを踏まえた新たな農業ビジョン策定の背景

**事務局** (資料1に基づき説明)

[概要]

前農業ビジョンに基づき事業を推進してきたが、担い手の高齢化や後継者不足、有害鳥獣被害などにより、農業者の耕作意欲が低下傾向となり、遊休農地が増加している。そのような中、現在の農業資産を生かし、市民と農業者のすべてが農業を楽しめる姿を目指し、前回の農業ビジョンによる有効的な施策の継続に加え、消費者である市民や飲食店などの意見を取り入れた明るい農業施策となるような方向性を示すこととする。

### (2) 生駒市の農業の現状について

**事務局** (資料2に基づき説明)

[概要]

農業者の平均年齢は66.8歳で、60歳以上が約73%を占めている。  
農家数と耕地面積は減少し、土地持ち非農家とその面積が増加している。  
販売額が少ない農家が減少し、販売額300万円以上の販売額の農家が増加している。年間販売額50万円未満の農家が約93%を占めている。  
耕作放棄地は減少しているが、新規就農や転用によるものと推測される。  
遊休農地活用事業及び新規就農により、12haの耕作放棄地が解消された。  
イノシシの捕獲数が平成28年度に例年の3倍近く増加し、現在も高止まりしている。  
学校給食の出荷量は近年大きな変動なし。  
市内の地場野菜等販売店舗は6店、地場野菜等利用飲食店は7店舗。  
青空市場等の開催状況について、市が関与していないものの方が開催回数が多い。

**座長** 農業センサスについて、属地主義により調査対象は市内在住の農家であるため、耕作放棄地面積等の実態は農業センサスの調査結果より悪いと考えてください。

### (3) 消費者ワークショップについて

**事務局** (資料3に基づき説明)

[概要]

公募市民5名によるワークショップを開催し、4つの提案を受けた。  
提案1：農業政策に「生産者の視点」に加えて、「市民の視点」や「農家の視点」、「PRの視点」を取り入れ、「エンターテイメント農業」として発信する。

提案2：農産物の地域の販路や拠点として、市内のコンビニエンスストアと連携する。

提案3：小学校区単位で農家と市民が協働するモデル事業を考え、市内に広めていく。

提案4：ニーズに対応して、新しい技術の導入や、新しい連携等も進める。

**参加者** 保育園で農業体験を実施することにより、農家と保護者に接点生まれ、保護者が迎えに来た際に野菜を購入していくという事例があるらしい。市民との協働モデルとして本市でも検討するのではないかな。

**参加者** コンビニの駐車場では、軽トラで販売する場合、雨天時に販売できない。

**参加者** 青空市場等において、スーパーと差別化を図るため、栽培時期をずらす、加工品に挑戦する、価格を下げるとか農業者も工夫が必要である。

**参加者** コンビニでの野菜販売について、コンビニ利用者はカット野菜とか利便性を求めており、加工していない生鮮野菜の販売では、需要と供給がマッチングしないのではないかな。

**座長** 確かにコンビニでの販売方法は検討の余地があるが、高齢者のコンビニ利用も増加しており、ある程度は需要が見込めると思う。

**参加者** 同じ時期に大量に収穫を迎え、消費しきれなかったり、食べる分には問題ないが、大きさや形状等の理由で商品として販売が困難なものがある。

それらを捨てずに、なにか利用する方法がないかな。

**参加者** 製粉機械を設置する場所を借りる代わりに、自由に利用を認めている事例がある。粉にすれば、加工品などに容易に利用できるようになる。

#### (4) 飲食店・学校給食センター聞き取りについて

**事務局** (資料4に基づき説明)

[概要]

市内飲食店に聞き取りを行った結果、一例として、できるだけ市内農産物を利用しようとしても20%揃ったらい方で、メニューに合わせて野菜を仕入れるのではなく、野菜に合わせてメニューを考えている状況にあるということであった。地場野菜の購入場所がわからない、数件の農家やスーパーを回らないといけないといった課題があげられ、生産者とその生産物のリストや販売所の情報が欲しいという意見を頂いた。

給食センターにおいては、地産地消のため市内農産物の利用を推進している。

通常は、2週間程前に卸売業者に発注すれば野菜を揃えることができるが、市内農産物の利用には、各農業者の出荷日や出荷数量を調整せねばならず、業務が煩雑である。

窓口が一本化されていれば、発注しやすくなる。

#### (5) 農家アンケート結果でわかったこと

(資料5のとおり)

#### (6) これからの生駒市の農業の方向性について

**事務局** (資料6に基づき説明)

[概要]

大きな方向性として、プロの農業者向け施策として農業振興地域の指定を目指し、市民等向けにみんなが楽しめる農業を目指す。

**参加者** 高齢化によることもあるが、鳥獣被害により意欲を削がれ、離農者が増えているので、獣害対策もビジョンに盛り込んでほしい。

**参加者** 現状についてだけでなく、5年後、10年後の見通しを記載し、その見通しに対し、どのような対策をとるのか明確にしたほうがよいのではないかな。

**参加者** 個人的には、農業振興地域の指定よりも、市民による実験的取組を推進し、生駒市に合った取組を模索していくほうがよいのではないかな。

**参加者** 小学校区単位での市民が協働するモデル事業の提案があったが、農福連携のように、農業は市民同士が連携する媒介となることのできるものであるため、地域コミュニティに限らず、テーマコミュニティなど様々なコミュニティとの農業の

連携を模索してほしい。

(7) その他

**事務局** 次回の推進懇話会では農業ビジョンの素案を提示したく、12月下旬から1月上旬あたりで開催したい。